

研究基盤としての社会科学古典資料センター
—社会科学古典資料センター長に再任されて—

The Center for Historical Social Science Literature as Research Institute

江夏由樹

ENATSU Yoshiki

2010年12月に社会科学古典資料センター長に就任して後、本センターが所蔵するコレクションの数々、その受け入れの経緯、それら資料の保存修復の仕事、関連する各種講習会の開催などについて、機会あるごとに、少しずつ理解を深めてきました。そうしたなかで、コレクションの蒐集、本センターの設立・運営を推進した旧高商以来の一橋大学の理想、その実現に向けて注がれた諸先輩の大変な努力の一端に触れることができました。私自身は中国経済史研究を専門としていますが、狭い意味での「門外漢」である私の眼から見ても、本センターが所蔵するコレクション、そこに展開している事業は大変魅力あるものといえます。つまり、「西洋古典」の領域だけにとどまることなく、センターは大きな学問的な広がりを持った世界を提供しています。また、一橋大学がリサーチ・ユニバーシティーを自認するからには、この学問的な世界をどのようにアカデミックに継承・発展させていくかということが、重要な課題となってきます。この度、センター長に再任されたことを機会に、研究基盤としてのセンターの役割という点について、少々述べてみたいと思います。

本センターはこれまで西洋古典資料の所蔵・保存修復・公開等の分野で大きな役割を果たしてきました。コレクションの質の高さは世界的にも良く知られています。また、国立大学で蔵書の保存修復のための工房を有しているのは、本センターのみです。こうした貴重書図書館としての役割に加え、センター所蔵のコレクションを対象とする研究プロジェクトが積極的に推進されていることも忘れることはできません。例えば、現在、科学研究費補助金等の助成を得て、次のような研究を進めています。まず、「西洋社会科学古典資料の書誌学的調査に基づく印刷地推定法に関する実証的研究」（基盤研究B、研究代表者：山崎耕一）は、所蔵する各資料の印刷・製本などの特徴を分析し、そこから、それぞれの実際の印刷地を推定しようとする試みです。例えば、西欧各地でかつて出版された書物のなかには、「北京」を発行地とするものなどが含まれています。これは、当時の厳しい検閲を免れるために、その発行地を「北京」としたと考えられており、この研究はそれら資料の本当の印刷地を推定するという課題と関わってきます。西洋古典資料を大量に所蔵する本センターであればこそ、推進できる研究課題といえます。また、「ロブリエール家文書を取り巻く世界—フランス貴族所領経営と領主文書の謎を解く」（挑戦的萌芽研究、研究代表者：大月康弘）は、中世フランスの貴族であったロブリエール家の文書を読み解いていく研究です。この文書史料は本センターのコレクションの一つであるフランクリン文庫のなかに収められています。センターは他にも貴重な一次史料を有しており、これら文書類を利用する歴史研究を遂行することは、センターの重要な任務となっています。さらに、「一橋大学社会科学古典資料センター所蔵の旅行記についての研究」（挑戦的萌芽研究、研究代表者：江夏由樹）は、西欧人がかつて記したロシア・アジアの旅行記の内容を明らかにし

ようとする作業です。そこにある数多くの挿画などは大変興味深いものです。事実とフィクションが織り交じったこれらの旅行記の世界に入り込むことから、本研究は当時の西欧人が見たアジア世界、さらに彼らの対アジア観といったものに迫ることを目指しています。人員・予算等に大きな制約があるなかで、本センターがこうした多方面にわたる研究プロジェクトを展開していることは大いに強調されてよいといえます。

これら研究活動に加え、昨年夏、学術振興会の委託事業である「ひらめき☆ときめきサイエンス」のプロジェクトとして、センターは「本を残す 本を伝える～書籍の保存と修復」という企画を実施しました。これは、中学生・高校生を対象に、センター所蔵の資料に触れ、簡単な製本や古書の修復作業を体験してもらおうというものです。将来の学生・研究者の卵が参加したこの企画は大変好評を得ました。

貴重コレクションの所蔵・保存修復・公開・そこでの研究の遂行という事業は学問的には大変地味なものです。一橋大学にとって重要な意味をもっています。本学の宝であるセンターの事業をより発展させていくためには、その組織的な基盤を一層拡充していく必要があります。対応が急がれる資料のデジタル化、その公開を推進するためにも、そのことが強く望まれます。こうしたセンターの基盤整備に今後も一層取り組んでいきたいと考えています。

(一橋大学社会科学古典資料センター長、一橋大学大学院経済学研究科教授)